

女

上卷全

録

子

亥女禮女及者
 亥子如州而六
 中三
 多
 妙
 比
 万
 千十二

千十二

娘はみききもあはれあはれはめいなりけり
 忍乃人ともいふはこれとまはれはれはれ
 らん親族すはれはれはれはれはれはれはれ
 をはれはれはれはれはれはれはれはれはれ
 あはれはれはれはれはれはれはれはれはれ
 終り歌ひはれはれはれはれはれはれはれ
 いさねとまはれはれはれはれはれはれはれ
 乃らるはれはれはれはれはれはれはれはれ
 天保十一年五月



それ書物とてついでに
 ちりばめのかしらも
 せれどくふらり竹
 とついでにそれに字をか
 つて付てう後得の伏し
 茶ふいといふ人紙を
 作らるゝんといふ人
 等とついでによう
 紙等りてまきわしと
 とらつてう産の伏し
 板にあらうてん中とく
 るまらんちのまを捧ふ



けつといふ様いあづさ
 とて本れ玉のれが
 上紙本を用ゆと
 つゝあかりさるが
 そのせよぬざんが
 よろづれとてん
 しつゝるまはんよ
 あづさといふ女と
 ついでにふらり平目
 ついでにふらり人
 あまどついでに
 みるらづいふ



實皇女

實皇女ハ舒明

天皇此皇女あり幸

崩りぬいて皇位

に仰せり二年天下

大旱しゆれども

て行くもあども

あく皇女大に歎を

ぬひ南園のゆき

幸しと天と修ひて

に大よあつること

も百萬民賑ひ作



檀林皇女

檀林天皇の

御后より

とらるる

ゆのちり

く山雲い

りつらり

大元の

け道前と

なれり

婦人

たよかん



静女

静女其暱且正

其暱且正

其暱且正

其暱且正

其暱且正

其暱且正

其暱且正

其暱且正

其暱且正

其暱且正

其暱且正



女房下野

後冷泉院の御時月のつらり

りる教南殿つらりつらりせめの中え

此御方あるの女房とらま

つらりつらりつらり

作あつらつとつらり

てあつらつらつら

つらりつらりつらり

あつらつ世の月れ

つらりつらりつらり

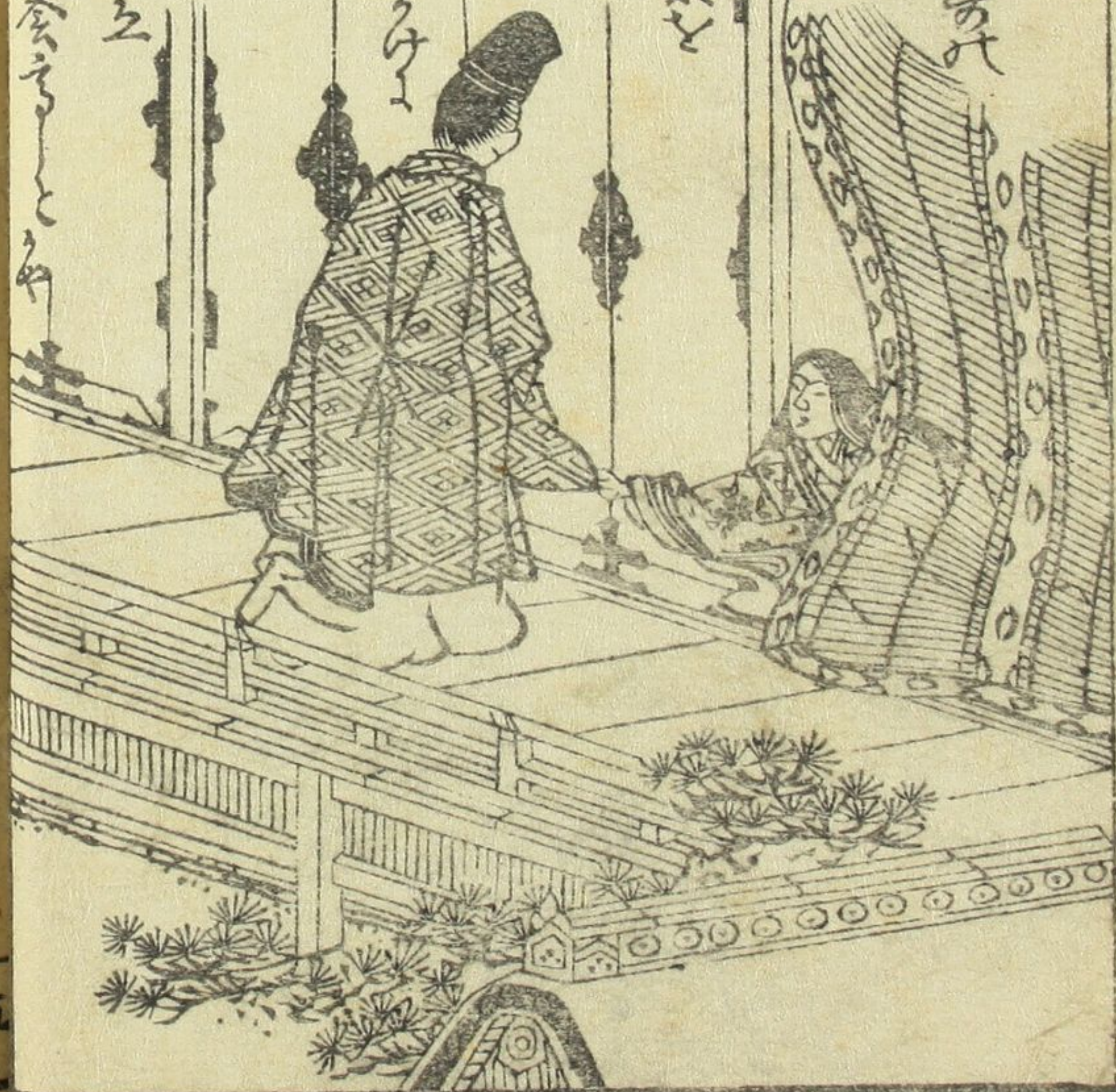
みららつらつら

君らつらつらつら



小式部内侍

泉式部が娘の十二よりおれ
参りて或時大内より奇の
いふはつらるに母丹後
にりてあまのいふ小式部と
是れは世に小式部といふが
大内御所はつらるに丹後
より参りつらるやとあまのいふ
のこあひしつらるあまのいふ
大内山々の方れをいふは
まことあまのいふ天の橋を
かゝるにまのいふよりいふとあまのいふ



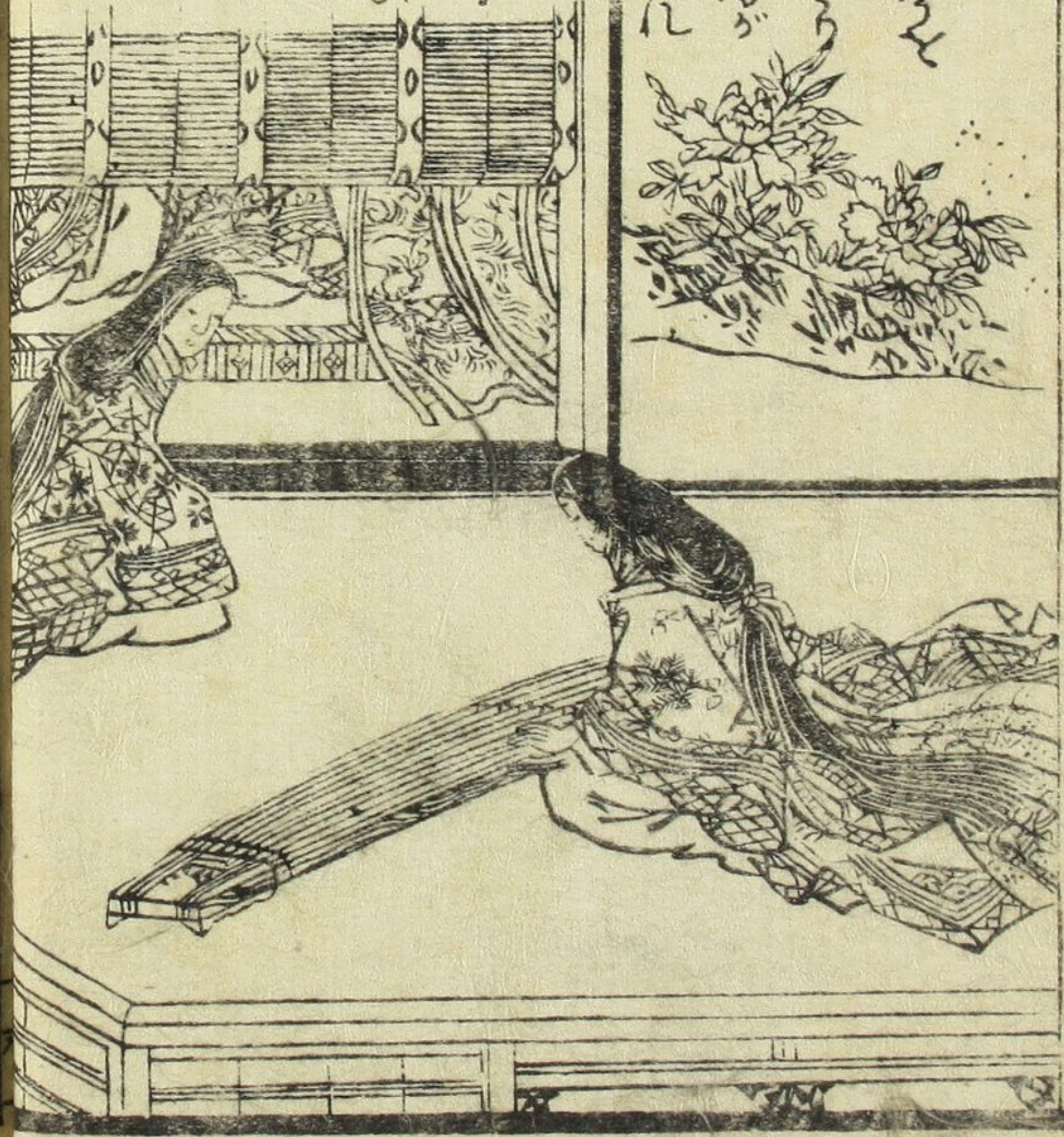
伊勢補親女

上东门院中まゝておりのり付伊勢
ともめてあつけり補親が女は
奇よむいんとあまのいふが
或人八手橋となりつらる御堂殿
御前よりおりのり付伊勢と
伊勢が傍にせつらる
つらるてあまのいふ
古のちんあまのいふ
八手橋つらるあまのいふ
あまのいふ
とよみてあまのいふ
人まかんあまのいふ



空武部

上东门院の由方小琴を
よき湯人の今素志より
はる武部と名を以女唐が
琴よりひねりまふをまじ
ぬ名を付しを伴り
思ふはしとを付しをけり
門院結よるををまじ
りり琴のたの先は弦の
たらしをを思ふはしと
しりは武部の湯氏
ゆげの作者なり



巫女

意ん信部令崎山よ山よ
巫女のつらとを
祈りてよがん中の祈りと
うらやとありはれが
巫女があらに十方位の
よは海山福ををまじ
ふのたれまをれはつら
あるとををまじと
おしとをれは意ん
傍部とてけはしと
まじとをまじと



君臣
 かゝ天子より忠もたれ
 よいふまで忠とありけ
 とある時天の命ずるふ
 られ人のこととておさ
 けるれ人備えつらび
 けするそのはるの恥を
 とがむらゝあつたぐ
 一とぢらに忠誠とげを
 うその君をとおゆは
 りんごささるらうら
 りんご



父子

人の教くしては忠に
 まらして忠一いつじ
 むして勿備るれがも礼
 もさく教乃もあさか半
 子の子と忠をさるとあま
 ドいつとけされようおさ
 らださやバ一み
 て、孝にとも申るれが平
 生孝のせりつらうゆも
 ぶ一たさく父母を理を
 のさすとも情をたす



夫婦

夫婦二人偏のふれして
夫ハ夫また女ハ地ふ
かゞらちまはまのま
よまらひまハ書を
つらねむらさしと云
自然のこころを
さばりしは程よこ
これハ今日何穴の
るも明日ハたらま
備敵のうらまをむす
おそるべし



兄弟

兄弟ハりく同根生
てまゝこそこれより
つらハりしは程よこ
のた程はうらまは
まやまを父母れ
一妹といつてむこ
のこゝろはひしれ
るくゞ凡世は兄弟
中何れもといふ
まゝすまて礼
ふが由と置はま



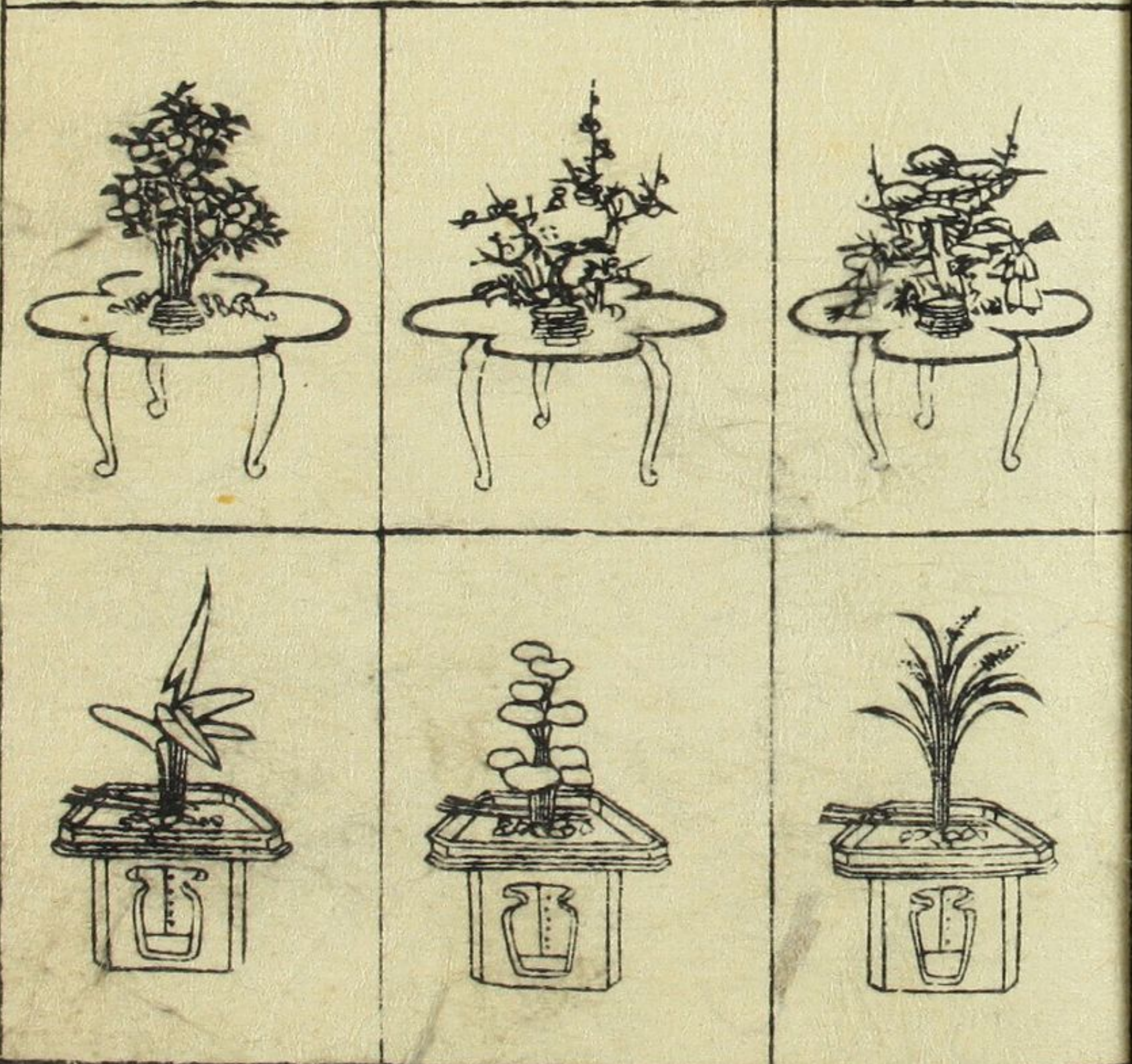
朋友

とびてももぢらぬまじい
 のたはたひいふて用
 ひてとよまこてとよす
 めまのりさこてとよす
 ひるとなまるとはた
 へ信のりてまこてとよ
 まじらるとよまこてとよ
 信よまこてとよまこて
 りまこてとよまこてとよ
 くまこてとよまこてとよ
 りまこてとよまこてとよ



婚禮式の事

○結婚の儀よたのまこと
 あり上中下れおつと
 りどもやうらつと申せ
 まるい練のおそご
 りのののつあひま
 かさつとつさう落つ
 ちまひびがらまわつ
 上と下と揚着はさ
 七種くまじ申るハ練
 のふれ一板のお一練
 一草一木一草一木



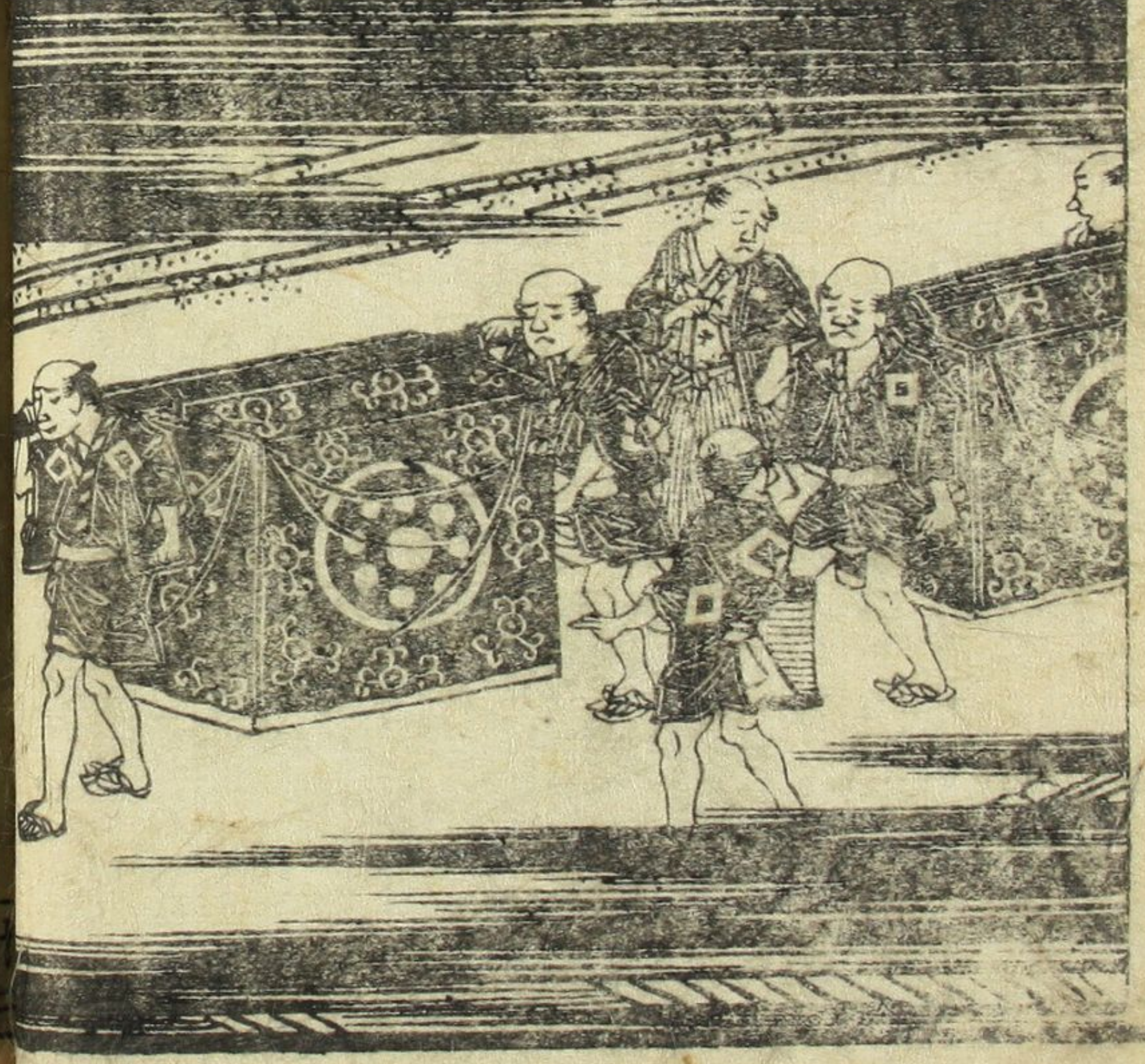
又此の種くまびし下ら
 小袖つとあ小袖と一も
 二考と種くまびし下ら
 ちし右の海うるれども
 分限は後どてとてし引
 正どきして礼の本家と
 又むとれらとよりまを
 ちうともこの種後あれを
 ちうともまうとあよりむむ
 ここのこは糖の種後あり
 よあよりむむこの種後ハ
 るしとてま



○婚礼の事ふしりてよ
 めの種とむこのまれいん
 のちいん人にあまがむ
 ひよあてよあれつるま
 こるまとながひいよめど
 くら挨拶してむとて
 後人こをうけとてす
 かふかて入るむり
 ○むと八よつをふあつよ
 めハも存ふるをんを
 さてあつてのちおとま
 した女中しよとて持



ちぬめのきんぎょとてこ敷の
 こもくしんくちんくちん
 ちぬのひとねもまはす
 りのめとちぬもすまて
 又ちぬ人きんぎょひとの
 すんくちんくちんくちん
 ちぬめのきんぎょとてこ敷
 のこもくしんくちんくちん
 りぬめとちぬのきんぎょと
 ちぬとてこ敷のきんぎょ
 ちぬとてすんくちんくちん
 ちぬとてすんくちんくちん



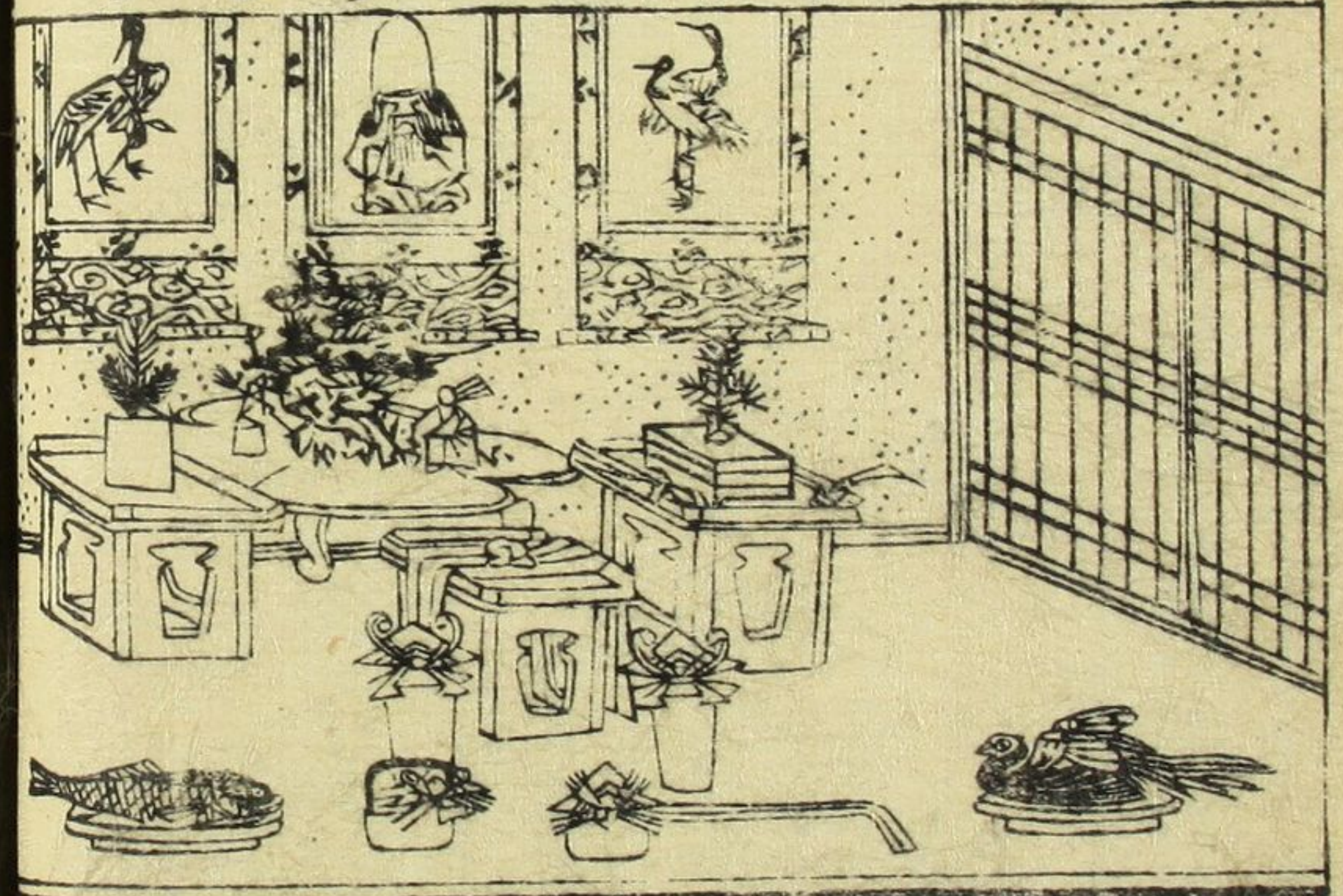
ちぬのきんぎょとてこ敷の
 こもくしんくちんくちん
 ちぬのひとねもまはす
 りのめとちぬもすまて
 又ちぬ人きんぎょひとの
 すんくちんくちんくちん
 ちぬめのきんぎょとてこ敷
 のこもくしんくちんくちん
 りぬめとちぬのきんぎょと
 ちぬとてこ敷のきんぎょ
 ちぬとてすんくちんくちん
 ちぬとてすんくちんくちん



○つらつらと一れふそぞ
 ハ夢地のそめふそぞと
 ちるべーそらちちち
 こつらとむらむらい
 ちと又探探のよ
 さゆぐいそそまね
 もろんばねえかべと
 ○たつさうなれえかう
 一為の二種三為の三種と
 るべーたののか式ハ一
 斗入の白木をそつそ
 つらびるいそつ編の
 るそそやねるそつた
 るそやねるそつた
 ちつたにふそつけ
 よそまねるそそほの
 たらこいふ又そつそ
 ーそそとさーたらこ
 みるり
 ○おのい合二合とち
 べーそそまねるそつ
 おハ一おとち一巻も
 ちるべー又そおふま
 いるべーハ一ツとちくび



鐘ハ一尺八寸と云々
 一と云ハ二ツの
 書と云々
 びけり
 ハあけ
 ぐ
 ハ
 類ハつが
 粉づけ
 り
 二ハ



女いらめま

一女子ハ
 友ハ
 道ハ
 父母の

左橋平人
 浦北
 赤
 赤



左九河内
 色ハ
 赤
 赤



左九河内
 赤
 赤



右伊勢
と楊の山いふ
まらちん
とくちん
あはる人
あじとあは



左中納言あは持
妻の母
あはる
あはるの
あはるの
あはるの



右山色赤人
月の浦
ほみち
かきさ
あはる



左五原業平
世中よはて
ほろの
あはる
あはる
あはる



右信正遍照
ほろの
あはる
あはる
あはる



左志性法師
あはる
あはる
あはる
あはる



世とまはるのあはる
能押えそあはる
あはるのあはる
あはるのあはる
あはるのあはる
あはるのあはる
あはるのあはる
あはるのあはる

一女子他家より来て人
はあはるのあはる
あはるのあはる
あはるのあはる
あはるのあはる
あはるのあはる
あはるのあはる
あはるのあはる

右 紀友則
夕べの川
千鳥の鳴き
うせよ



左 猿丸さま
とらちの
あつた
うさこも



右 小野小町
ワひぬき
うたの松
うさこも



左 中納言重頼
みづの
まの
うたの松
うさこも



右 中納言頼忠
あつた
うさこも



左 権中納言教忠
伊勢の
うさこも



音よかきうららさ
らん 貌よのしじん
を優みか
んぞあさり
法華といふ
書おも留との安を

かきうららさ
性をかきうららさ
しねし
生質れんといふ
一女の和記
てもかきうららさ

右 壬生忠岑

子れ目する

母をこり

小松のおくさ

子代乃なり

おふとひら



左 友原教の教

秋のぬしめ

さゆふん

風れきあそ

ゆらつれぬ



右 源平之

風をく

あつきの

くくくおと

ゆらつれぬ



左 藤原具風

誰よりも

人よせん

想も

なすくぬ



右 清原元輔

秋の母れ

あそとあ

座の

うら



左 友原清正

ては風

か

あつきの

うら



せら若むらへ清る

一世のまらるる

清くくくく

女子のくく

身城をくく

かぐはか海女子ハ

好文情くむく

かぎり

一巻清くく

情い生く生る

情く知雅とく

くくくく

右 去生忠見

かづねとも

とまのりえ

まき

あきと

あきと



左 平重盛

あきと

あきと

あきと

あきと

あきと



右 中勢

あきと

あきと

あきと

あきと



伊呂波の事

伊呂波は十七字なり

あきと

あきと

あきと

あきと

あきと

あきと

あきと

あきと

あきと

あきと

あきと

あきと

あきと

胎心又るり貞と

女は操たしく

一生むくは女の

月の化乃まじは

こえんざらぬや

勿悔ん少しの

くもりもなれを

い清と志の際

くよ移月の事に

は事あはせ貪

るあつあつ秋

里の方あはれ

是なりと云ふ法大師の作
 かり片假名は昔傳春
 天平勝宝年中に大和
 の郡におめて又書の手
 字は良書と云ふれた
 て片仮名又十字と傳
 へたゆゑに即ち
 イロハニホトチリ又ル
 ワカヨタレソツチチ。云
 ウ井ノオクヤマケクコエ
 テアサキユメとし。エヒ
 モセス。



夫^{おつと}名^な親^{しん}歎^{たん}あは
 厚^{あつ}れをいふ^いは
 仁^{にん}親^{しん}れらう^{らう}
 難^{なん}し^しま^まなり^{なり}繕^{せん}
 八^は家^け乃^の系^{けい}馬^ばと
 し^しと^と胎^{たい}は^は嫁^{よめ}

し^しと^と子^この^の相^{さう}
 續^{ぞく}の^のあ^あ系^{けい}馬^ばと
 以^もて^て又^{また}種^{しゆ}と^と中^{ちゆう}
 侍^{しやく}る^るさ^され^れば^ば又^{また}徳^{とく}を
 備^{そな}へ^へる^る親^{しん}と^とか^かぎ^ぎして
 中^{ちゆう}を^をい^いふ^ふ家^けの^のり^り聖^{せい}

近世女三筆

小野のお通八右大臣孫
公乃侍女なり嫁女がら容
整とて女ささく嫁小
和奇文孝子達して子
孫の母なれたるく就選
ふくもれば八世の人を
を移しけるなり
長谷川お貞はては氏
と知るべしけりたより
御所へまつてせし時お
おとすたははれとまふ

てし十二年を後にいふゆ
終りのおの田はあてまを
らめておのれを持南はは
附ぶつたおおたの風を愛
して一流の女をよとせし世
おとす流と移し奉るなり
佐々木志保は女懸女ハ
より父の兼備とまらざり
てま死してうきうき他
に嫁いことと境はとら
どもうらうらおのそと
ついで女筆のほまれなり

人のをいへふも悪
ふ少しれたる侍も
る人いふおのれを積
るまゝ夫と死を以
る若ハ少しれたるり
とておのれを以て

勿き積りて大若と
なるといふこと事ハ
少しれたるり情を
孝懐女女の乃とま
るるふあありお
女三筆 後

とあふむしれあをえそ
男の心とよむるたあ
むしよりまねこそ
一あがらうらうら
てもはれつゝいふた人
の心ねとのせうまの
るりされば女中の養
也一いふかゝことと
こらうらうら
一女中ハうらも男は
とるうらうら女
よるれをわ

琴の事

一琴ハ樂器の一ツとて
しく愛人もこれを
あそびあひも
うらうらうらも
ぶさうらのに
ハ名人おわ
ハ十二の紐あり
端長るの乳曲あり女
中ハうらうら
おのれをわ

一大事をも知ら

くうらうら

かあ子

一父母乃海に

うすまは孝乃道

疎ハあ

一史をかろし免

うまは

道をわ

ふ事

虫のめて下の白とやうな
 かまこしてよの白を
 ぶんどてありせよふ
 里かきをうのとはい
 らびつひまのをよれ
 といふさなり



香のさなり
 丁娘香

一盞の香炉をおくこと
 香炉の中かきをよれ
 香のさなり
 一香城さなり
 又かきをよれ
 一かきをよれ
 一かきをよれ
 一かきをよれ

一女^{よんな}中^{ちゆう}猿利根^{ざるこん}

海^{うみ}よりい^い万^{まん}り^り

つ^つ人^{ひと}を^を残^{のこ}る

事^{こと}

一^{ひと}人^{ひと}の^の中^{ちゆう}に^にて^て



十種香といふハ香を好む
 香れ名をせむるふじ
 符とそとくふんといふ
 きの香といふハ香を
 好んでふじの名をいふ
 袖符ハハのなり
 一香ハ一とせといふべし
 び一類といふべし

香會

小香 花月香 鞍馬香
 源平香 宇治山 系園
 夏科 時文 帷帳香
 ほか名多し十種香と
 ありしとしてすしづ
 ちがひありつがまも
 こゝろくさし



て人の慈をみ

身と楽しむ

一各類乃具おのれ

炎森をけ

右つゝいんぐ

しん

一美も絨のはあ

しんとおと氣

随を好む事

一人を北をい



一さくらんこのてび
 一あおの秘傳
 一かきこ
 一さくらんこのてび

一さくらんこのてび
 一あおの秘傳
 一かきこ
 一さくらんこのてび
 一あおの秘傳
 一かきこ
 一さくらんこのてび
 一あおの秘傳
 一かきこ
 一さくらんこのてび
 一あおの秘傳
 一かきこ

一かうふ

一かきこ

一男姑り麻事

一しそ人の後

一かきこ

一終子り疎み

一他人若心嘲を恥

一かきこ

一男り赤り縦

一かきこ

○あぢりりハあうねよ
 ちーやまやちのりい
 おもぢろすしーまぜ
 二んそあー
 ○うすねぢぢみハすらの
 ちりり又ハあすぢの
 ちれーとやちす
 ちーとまらちちち
 ちりあにちちち
 ちぢーかちちちち
 ちああちちちち



○ちちちやぢぢハ
 ちあちちハんそあ
 ちあぢぢーがひ
 ちちぢぢんをへて
 ぢー
 ○あぢぢぢハちち
 ちちぢぢんが
 ちんそあちちち
 ちちちせんぢち
 ちちちちち
 ○ちちちちちち
 ちちちちちちち

ちりりも親

色々

道城寺人

嫌い然り

友と巻す

らぶらぶとむちあず
 もよもよのまいた
 るはしろうけいなる
 うらうらうらうらうら



まよおおまよ
 ○お神よらうけいなる
 うらうらとむちあず
 うらうけいなるまいた
 のまいたまいたまいた
 まよおおまよ又あり
 まよおおまよまいた
 まよおおまよまいた
 まよおおまよまいた
 ○まよおおまよまいた
 まよおおまよまいた

一 一 一 一 一
 石機娘にまうせ
 けりてんうら
 まよおおまよ
 右に條くつひよ

けりてんうら
 まよおおまよ
 右に條くつひよ
 まよおおまよ
 けりてんうら
 まよおおまよ
 右に條くつひよ
 まよおおまよ
 けりてんうら
 まよおおまよ
 右に條くつひよ



○たゞのちのちのたゞ
 せんぶてあ〜
 ○たゞのちのちのたゞ
 ま〜は〜るハ〜の
 ま〜も〜と〜

○たゞのちのちのたゞ
 せんぶてあ〜
 ○たゞのちのちのたゞ
 ま〜は〜るハ〜の
 ま〜も〜と〜

於^{てん}於^り夫^ら於^る陽^り也
 して強^{つよ}く男^{をとこ}乃
 道^ちなり地^ち陰^{いん}也
 一^ち事^{こと}和^{やわら}ぐ女^{をんな}の
 み^みら^ら形^{かたち}り陰^{いん}を

陽^り也^がと
 一^ち事^{こと}自^じ然^{ぜん}の^たり
 理^りなり也^が支^し婦^ふ
 於^{てん}於^り夫^ら地^ち也
 一^ち事^{こと}和^{やわら}ぐ女^{をんな}の
 み^みら^ら形^{かたち}り陰^{いん}を

妙業祕方

○こけこころ
ふむむむむむむむ
んんんんんんんん
めすすすすすすす
○さんごあああ
るるるるるるる
あああああああ
○ちんちんちんちん
あのかいんあか
しんしんしんしん

つげん
○あひあひあひあひ
あひあひあひあひ
○こころみみみみ
あひあひあひあひ
○あひあひあひあひ
あひあひあひあひ
○あひあひあひあひ
あひあひあひあひ

支を天れ

ぬいさぶら

まねら

乃道ね

知ら

中

友

知

知

ら

うたぬくーがさやく
 る中さいしそごぬの
 あづうそ移うつそそ
 ようそ中さあそそ
 ○あづがはらうりら
 せんまのーのこことや
 ーくづーとくろやそ
 みてごぬれあづふ
 て移うつけそよー
 ○ころり月ふあつきの
 ころりとうすみそそ
 ねそりらひてよー



男女相性鑑
 男本女本よらづり
 九げーらめハよたれ
 ともものらくせつあり
 男本女本ちあふよー
 しーしーこころんまき

方園かたうゑんの美うつくしりま
 づい人ひとらと音ね
 悪わるの友ともふらると
 りらや実武まことぶ
 友ともらと心こころまわらう
 家いへと活あそびる女むすめハ
 心こころしれとと好このむ
 ーや情なさけらふ
 かり人ひとの音ねと音ね
 と知しりやと音ね

家いへと活あそびる女むすめハ
 心こころしれとと好このむ
 ーや情なさけらふ
 かり人ひとの音ねと音ね
 と知しりやと音ね

よるべたの

男本女去 ちまろ

うししをいんあり

うら神とまろて

男本女合 ちまろ

子にえんうすく

ごちろえび

男本女水 ちまろ

子に人ありうら

しそめらうら

男本女火 ちまろ

子あれども衣合た

びしそくごらあり

男本女去 ちまろ

子まろくうらあり

いのちかぎ

男本女本 ちまろ

子まろく牛すえん

男本女合 ちまろ

衣合ともれちまろ

しそえんらうら

男本女水 ちまろ

子あれども衣合と

男本女去 ちまろ



屋敷に二人の親

ひまはてんてい

知家とらや

河津は珠し取

しれしねらあ



子かー氏神をまつべー
 男去女本 おまー
 子つら知よーのらまや
 あさるひごまー
 男去女火 ちまー
 子又人衣念おまー
 りもららけまー
 男去女念 たまー
 毛神をまつまー
 よらまー
 男去女本 大まー
 子かーしらまー

子かー氏神をまつべー
 男去女本 おまー
 子つら知よーのらまや
 あさるひごまー
 男去女火 ちまー
 子又人衣念おまー
 りもららけまー
 男去女念 たまー
 毛神をまつまー
 よらまー
 男去女本 大まー
 子かーしらまー

礼と女にかる
 く身流る
 と好む
 物々くれと
 うかりんて

ら成まり
 梅り
 又常此理
 く生
 っもあ



男水女火 大いなり
 子何きどもやぐり
 男水女金 大いなり
 子何きどもやぐり
 男んぞくおや
 相生 盤終

いあゝ十あれり
 ○男水女火 大いなり
 子何きどもやぐり
 男んぞくおや
 相生 盤終
 中八ッちがひニッちがひも
 此あゝ十あれり
 此とし男と酒のとし女と
 十ッちがひ酒と酒と此
 女より子と此男は酒
 酒より酒 存は是小酒
 酒より酒 存は是小酒
 酒より酒 存は是小酒
 えんぐもてこれいむ
 有針を針のあ

とる身みを脩おさむ

道みちはなす

ひもつりといふ

女むすめとしてかまるもの

希まれにまりまり

女むすめはからいふ

あゝあらいふ

邪よこしまにからいふ

寛あまにからいふ

いいふいふ

○本姓の人ハ西暦八月廿
 日有れと云ふけハ西暦
 中七七年の正月辰と
 二月辰日辰と云ふ
 申と云ふ中七七年の
 ○全性の人ハ西暦二月廿
 日有れと云ふけハ西暦
 中七七年の正月辰と
 九月辰日辰と云ふ
 寅と云ふ中七七年の
 ○火性の人ハ西暦十一月廿
 日有れと云ふけハ西暦

中七七年の正月辰と
 六月未日未と云ふ
 寅と云ふ中七七年の
 ○土性水性の人ハ西暦
 八月廿日未と云ふ
 子年と云ふ中七七年の
 西暦十一月廿日未と云
 子年と云ふ中七七年の
 子年と云ふ中七七年の
 ○火性と土性を
 本より西暦十一月廿日未と云
 火の徳子と云ふ
 土性の年ハ
 子年と云ふ

家よりびとて支み

志とぶい男始小

侍つる身もまじバ

父母れりとてと

浦るハ誓乃らら

なり終て者なりを

長をひと身一なり

面より玉粉と粉

了發かたらと粉

ふのこおくんの

平生心女の事

一 家ハ全殿上りては

も海へざれば

一 衣袂ハ神おのりて

あてらるれば

一 食肉ハ味はぬべし

むりては

一 書ハらるるあはれ

かしくたが

一 愛するも心は

つひわた

一 留ても

つひに

一人の子姫の

あり又理れ

ありあやう

があはれ

一 上なるも

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

ゆづみを揉んと

まは人稀形あり

心ざし恋し合はる

しるねくは愛くは

と縁くは心も私

かゞは

うれむるは

ども智行る人

律もまゝめ

想して我の

まふら〜び 書者のあや
 まらふまされ〜らあのこと
 書者一切のあや
 まら〜びのあや
 一何あもあれら〜まき
 ぶ〜びのあや
 いら〜ら〜ら
 あ〜ら〜ら
 一何あもあれら〜まき
 と〜ら〜ら
 と〜ら〜ら



まら〜ら〜ら
 何〜ら〜ら
 一何あもあれら〜まき
 と〜ら〜ら
 と〜ら〜ら
 一何あもあれら〜まき
 と〜ら〜ら
 と〜ら〜ら

知〜ら〜ら
 一何あもあれら〜まき
 や〜ら〜ら
 お〜ら〜ら
 ね〜ら〜ら

わろしといひてはるが
もあつたふんを後とお
しやぶるまをたけら
るはるあつたふんを
とらふしむる食飲と
とらふしむる

一わろしといひてはるが
かろしといひてはるが
あつたふんを後とお
しやぶるまをたけら
るはるあつたふんを
とらふしむる食飲と
とらふしむる

あつたふんを後とお
しやぶるまをたけら
るはるあつたふんを
とらふしむる食飲と
とらふしむる
一わろしといひてはるが
かろしといひてはるが
あつたふんを後とお
しやぶるまをたけら
るはるあつたふんを
とらふしむる食飲と
とらふしむる

一く 短 せん 短 せん

むく むく 短 せん 短 せん

一く く 短 せん 短 せん

あ あ 短 せん 短 せん

は は 短 せん 短 せん

乃 乃 短 せん 短 せん

短 せん 短 せん

短 せん 短 せん

短 せん 短 せん

短 せん 短 せん

113年

天保十一庚子年正月

書林

系三系通御書所

大坂の砂橋南本町

河内屋記一玄清

日小江戸坂寺丁目

今津屋三席

日九女町

秋田屋良

胆

戌 	申 	午 	辰 	寅 	子 
亥 	酉 	未 	巳 	卯 	丑 

名 月 二 十

正月 あけぼの月	二月 あけぼの月	三月 あけぼの月	四月 あけぼの月	五月 あけぼの月	六月 あけぼの月
七月 あけぼの月	八月 あけぼの月	九月 あけぼの月	十月 あけぼの月	十一月 あけぼの月	十二月 あけぼの月

